

人民党会派からの脱退は FIDESZ の敗北

3月3日、欧州議会の最大会派人民党グループは、議員個人のみならず、当該国の議員グループを除名できる規約改定を決議した。187名の議員のうち、賛成148、反対28、保留4の3分の2賛成票を得て、改定が決議された。これにともない、FIDESZは人民党グループから離脱することを決定した。

経緯

FIDESZは2000年に自由主義インターナショナルから離脱し、欧州人民党グループに加盟した。リベラリズムから保守主義の転換を図って、民族政党として国内支持基盤を固める方向に転換したのに伴う国際路線の転換である。2004年のEU加盟以後、欧州議会に議席を得たFIDESZは、人民党グループ会派に所属して活動してきた。

2015年の難民・移民の欧州への流入をめぐる、欧州人民党内部で大きな意見の相違が生まれた。FIDESZは難民・移民の強制割当を拒否し、難民・移民の流入を鼓舞するジョージ・ソロスを批判し、欧州委員会がソロスと結託して、野放図に難民・移民を欧州に流入させていると批判してきた。難民・移民受け入れを拒否するハンガリーにたいし、北欧諸国から厳しい批判が寄せられていたが、ハンガリー政府の主張を支持する一定の基盤が存在した。



ソロス＝ユンケル陰謀批判ポスター「ブリュッセルの企みを知る権利がある」

ところが、2019年に入り、欧州議会選挙を控えたFIDESZは国内キャンペーンとして、「ソロスとユンケル欧州委員長」を批判する巨大ポスターを全国に張り巡らせた。人民党グループから選出されたユンケル委員長を侮辱するポスターにたいし、人民党グループは即座に反応し、所属する9カ国の政党がFIDESZ除名の声を上げた。ウェーバー議員団長は急遽ブダペストを訪問し(3月12日)、オルバン首相にたいして、人民党グループ残留の条件として、「政治キャンペーンを止めること、ユンケル氏に謝罪すること、CEU(中欧大学)

をブダペストに残すこと」の3条件を提示した。

これにたいし、オルバン首相は即座にポスターを撤去することを約束したが、他の2条件については明確な返答を与えなかった。実際、CEU（アメリカの学位を与える大学院課程）は、ハンガリー政府からの明確な回答がないことを理由に、ウィーンへの移転を決めた（2019年12月）。

3月20日、欧州人民党グループは190対3の圧倒的多数で、FIDESZの資格停止処分を決定し、現在にまで至っている。以後の2年の間、はたして人民党グループがFIDESZを除名するのか、それともFIDESZが自らの意思でグループを離れるのかが注目されてきたが、いよいよ人民党グループが除名へのステップを踏むことになり、FIDESZは除名の不名誉を受ける前に、グループからの離脱を決めた。

小児病的「陰謀論」が裏目に

FIDESZは国内の地方の住民を支持基盤にしている。ブダペスト市と地方の数都市はリベラル・左派勢力が強いが、他の中小都市で圧倒的な支持を得ている。FIDESZの政治的キャンペーンはこの地方の中小都市の住民に狙いを定めたもので、単純な「ハンガリーの主敵」論やソロスの陰謀論を展開することで、民族主義的な意識を鼓舞してきた。

2015年の難民・移民流入問題はこのFIDESZ路線をさらに強化させるものになった。FIDESZが提唱する難民・移民の抑制策それ自体は真つ当な議論であるが、それが荒唐無稽な陰謀論と結び付けられることによって、国際的には「民族主義的な偏向」と見なされてきた。国内で反ソロスキャンペーンを張っている間はよかったが、それが国際的な広がりを見せる段になって、FIDESZへの国際批判が一挙に強まったのである。

ユンケル委員長批判は決定的な誤りであった。しかし、FIDESZ戦略の幼稚性、小児病的な勇み足が、FIDESZの足許をすくった。オルバン首相は「ソロス憎し」のあまり、ソロス財団が設立し、国際的な評価が高いCEU（Central European University）を「ソロス大学」とレッテル貼りしてハンガリーから追い出し、外国の財団から資金援助を受けているNGOを徴税で抑圧する法律を次から次へと制定するなど、国際的批判を受ける措置をとってきた。現在、欧州委員会はハンガリー政府にたいし、NGO組織を締め付けている法律の改定を要求している。

国内では通用する小児病的な政治キャンペーンを、そのまま国際的舞台で展開しようとしたことが、最終的に人民党グループからのFIDESZ排除につながった。

FIDESZはどこへ向かうのか

サイエル・ヨーゼフからFIDESZ議員団長を率いたドイツ・タマーシュヤスィーヤルト外相は、人民党会派を率いるウェーバー団長を口汚く罵っている。そこから窺えるのは、FIDESZが欧州議会での拠り所を失ったことへの怒りである。しかし、これはFIDESZの小児病的な傲慢さが招いたものであり、自業自得と言える。

当面、FIDESZ 議員は無所属議員として活動することになるが、今年末に予定されている主要な委員会ポストのリシャッフルで、現在保持している委員会ポストや副議長ポストを失うことが予想される。無所属議員の発言機会は極端に少なくなる。

この後、極右の議員会派に身を寄せるのか、それとも独立の会派を立ち上げるのか、あるいは人民党グループの良好な関係を維持して共同歩調をとるのかの選択肢がある。FIDESZ は「ポピュリスト政党」と決めつけられることを極端に嫌っている。したがって、イタリアやフランスの極右政党との連携を求めないと考えられるが、難しい選択が迫られている。

FIDESZ 政権による反ソロスキャンペーン、NGO 締付け法について、拙著『体制転換の政治経済社会学』第7章を参照されたい。